夜寒碑

911.3
ヨ

夜寒碑

松に寿碑の序
霜に對する月日わたるか
雨に雪四時止まさる
井の中の宋庭の松風
のこゝろもち人あるハ

諸子雑此継くる下也
硯四含紙透けの總
城乾坤山のおもわ
一基の碑を見るく
埋きむの石あとゝ咲か

偕君様尊へのか
地つの趣とあはれの
當し徹あるといへとも
方ゑ此山城の
深山か年と勝の
の

樹ゑ心手を観察し
いきつきの影と
遊月堂
書

吉柱江岸

以所能
慶紀述

妙二夜帰
實 ひとかたならす
歴 きりくに

天地與我並生而萬物與我無以異矣
草蟲之小可以喩大也慶君意在斯乎
銘曰
蟲之鳴矣露亦零矣胡然肅霜哀〻其
聲匪宇匪戸在我牀下百卉具腓誰率
曠野未幾見兮日月方除視令猶昔必
有與也

玉川居士撰

夜寒碑説

水消〻として志らとりの名はいはゞ艸叢之
虫しをは今のまてに傳へて半死に弱
居士蘇栗とし〻て味の戸世明られを指指れ
凡一万八千日光陰の矢を矢く積かさねんに
かくて山と見るほとしてそのなけき間に
いさゝの切をおもはれ氣とふくむあるひ乃
幸ともれく一世を渡は去てとこ露

の勝れたるなるらんやと見ゆる小林庵の庭に今に傾く
年を経き安々花を慕く短他を述て
いつしか我も若く為年少きへきしあれと
まいらす仏へハ絶えて紅葉の横文字書すてく
尊き時なれ分かりぬへし時俤空ぬる
つられ年の事を忘にしとて人と資紀の余宗
推しし悦ありてしやも思ひ故の末を偲て
堀口乃かみ水神とあれる竜生禅司の境

坤山所縁の碑を今資刻して一基乃
亀趺を立螭碑の面を西に勝し合る
松葉の社中玉川子に碑誌を乞ひく
けはれ承く山むすと也先々芭蕉翁の真
蹟とる先生のつく畑くさみされ塚も
幾く湫し芳声のかくれぬものや雅文
の始代々く一節り道の栄ゆく太祖之
その碑小域と同くせんすすめてくて

れこうましきに似るなれハ唯ひとすちに風雅を
慕しくて又稀日ふ年ある交ふかく親
情ともなしてこれらハ方中を旅後も親
なる哉誘ふに安らんとする其古の化盤を総
と編ミ二面寄ちらして寂寞の揚心
たりむ家ハ山播り南ともて擲とし霞
所万に田畑して播きの香をふはさ給
菓花の代性ひく序も見えさらる事なり

こゝろハ去度あつても花樹双えて地竃
あすける人里に千代とと帰らすとも
序岩の雨とかゝる草露の雪を語りに序
京も尓宿されハ月を余志てこ
餘さえり恵と其人を唯此熟り
よみ添抑ありし

宝暦三癸酉仲秋

独吟　紀逸

二輝帰ひと顔ハ寒しきりくに
后のことさきも白ら橋衣
時半の河ゟ伏鉄ふ雲飛て
峰ふと西のと竹遠ひ江り
物ひさく中に無川路の草
塀よりうへの高き柳

ウ

煙業の先へ出する一河新教
いらさら継敷と様ゟくのま
見り出比いて娘ゟ柱の風
莫て暮て相惹の中に巷状
東所を出て来年を立ぬる
氣何りのする七夕乃盈
月の弓指萌て弦さ張
小言つゝ秋風念くり

手なれたいと芝居(シバイ)らへのきよく衣
神もと見なり　此頃都路
者といへも花と菖蒲の岩の鶯
彼岸の七日　ありてく　一ゝ
(名)お代をすへし　浪のは葉ゆう足
二日三日　未満に　切りけ
琵琶法師や奥より奥のゑを学
さゝんく　雨の止はし

去川の船の音下　仙の石に住さ
渓水をあそへの　源りかられつ
杉りろの当る　碓井かしより
音の嵐と　蘇に　浅雪
筆紙も仕ふ新　春の縁より
杉　桂宮に　新りかさゝく
月の露衣にさつぬれて　川鳥
淡しの美婦らの新　刈　一斤

う

他家ゝ吉岡の紋家ハ云はしめ
弟子ハ深い人のかゝるを
こゝ出の紋をかく　九十日
雛とすくない程ゆかしさ
眉にまとふて遠く花の雲
文字にまたらくみの酒を

口附

蝶揚や椿の坂北夜の声　拾翠子
床待も水上ゆきしや天の川　眺明子
口癖の言ふ　積りて五月雨　蝦水子
さゝき方に麻きや狭川かな　流水子
捨漬に夜深くちら子かな　碑水子
粽とく手洗ひかけしや小笠原　齋藤子
星としき入家もかくれて　山桜　其棠子

四季混雑

花小入の調度ゆかし年錦　存義

乳母子より肥ては及ぬあつさかな　有佐

稲妻より一盃醤の眠気哉　平砂

引ぬくや縁を捨人かくれ家　米仲

海をし蝶漂と帆のゆく日かな　祇丞

木からしと成出汐星や矢筈雲　寛明

蝶寐るやあそむの鳴丸おぼろ　樓川

娵色とハ鰹も去ぬ名残かり　渭北

捨舟く鵜の口へ雨ふるか　湖十

埋木をひらち黄ばん紙子かな　青原

末文津へ流て椿く舟に胡蝶かな　再賀

古池をゆらまて蓮葉かな　珠来

口切やたたかふ寺る錦志稿　万立

灌仏や歌を汲出は女の子　超雪

豆まきと花の鼻唄せめて雪は人　秀猿

枝川の枝とはふ千鳥かな　吉門

山より見る枝や若く梅の花　赤庭

猿曳の顔を投出し師走かな　栖鴉

親は雲子は月夜なる涌かな　書泉

稲妻の末へさし移る秋の月　雉口

若鮎や子を産む石か水の泡　柳尼

鴫の声似れ鳥もしこ紀汐干かな　庭臺

春惜しく分を出る月ふとかな　由林

浪風の千鳥つゝ経く沖の石　清泉

昼日は山猿を捨て田植かな　巽雛

春の露人も包むや下涼　田社

春の雲永身にし川の渡かな　春来

社中

須清を見て枝くぐるやかんこ鳥　敬之

鶯の宿ともせし苔乃梅　純双

葉はたくやいつまはやき蓮の下　万丹

毛遷も青くうつれ虫の原　東園

あかりさす方に凡ることさ雨かな　紀羣

九つと人の出汐や山ざくら　臺案

糸中や志川ゟ赤地の地よ走れ　純堤

かさゝきや根より枝と橋たしら　狼牙

本枕て麻本な人てあるかな　純華

雨の日もかゝきやまきよる衣　純月

鶏中も雲の血筋やかきつばた　純範

紅白もらき花の中比ゟきぞ　純南

たんぽゝの書きもとめ之梅の花　純黄

麻袋あれ延る物ふき果ほぞ　五津

花の樹も実出しおやらふの月　甲府 逸府

来雨しこけれ枕ゟこゝろ入りけり　門 純明

初はつ四ゆ麻しき小綿ゟ枝　藹逸

かろきれ木葉新色も附雨かな　逸車

寐てから三人初なくきゝん〳〵　純宝

日ゝ照してまれハ〳〵けき幟なれ　純提婦 吉し丸

淋しさの糸を留まる簾の雲　純栢

冥の灯此油もしてふるふ　純木

若鮎や木綿織なる波の人　純什

蓑虫や忘れかゝる浮れ夜の塚　純貫

日も見え度さうし右川の秋のかげ　純生

古る草やその草を縮してへて候　純文

奥庭や日の涼しさる杜丹　硯舎

林ふるや月を旅と思ふとまらん　逸之

秋すゝしく

さそふれや汁の味此むらふされ　舟木

明ぬる稲実ハ金で出られけり　丹志

蛙鳴くや去年三月十六日　数仲

芥菊まや花出ろや萩の帽　純逸

凡田の桐も霧にまる郭ら　杜谷

席して三へ初むかしかな　純宝

日々照て暮れハ行き懐か花　純提婦 吉乙

涼しさの泉を染すり廉の雲　純栢

宵の灯北油きりてあるかな　純木

若鮎や木綿織る波のうへ　純什

蓑虫や笑ふかうに下れ夜の様　純貫

日も危度去りし山門の朝かな　純生

寺ゝ筆やその筆を綴しまへて候　純文

朝白やものゝくるゝに秋の暮　素介

さみだれ鶴のとのゝ夜を寒さ　純旭

雲雀降りくちに宿ほとゝぎす　純見

雲の根にくゝりせ池あり梅の花　純述

菜の中や花ちらちら初蝶　元升

志ら雲に音をあつめてさくらかな　連天

新月やちるさくら葉をまつはせ　純山

天人も蓮に住りやあやめの花　介撰

秋らしの声はさつて萩の露　純邦

蛍火のこぼれて涼し舟の人　豁雲

月花の去ぬさまやさゞれ石　稗のよふる　玉川

その夜深浮雲の風やかゝり雲　其鼎

蝙蝠のつい云雨や天の河　純貝

絃とさて弁にかゝるあつさかな　純述

さゞれや瀧へ影うつる寒　逸户

搗ちらく世段の広さに菜の露　市宝

かくれ家を志たへや夜半の月　官洲

まつれとするわれに月は稀かな　純悠

小蝶ちる霧に竹をも流しけり　純逸

口切や往くしくく松の声　流牧

昨夜の月わすれかねし下涼　冤籬

入相の鐘つく寺の積かな　純遊

おもかけや志月れは家に紅葉狩　純逸

将屋の背中合せて十夜かな　柳三

翔鳥やをのふところの盆　風交

撫子の何かに立て小袖んぞ蘇の汁　純畔

婦もここちも世の角や夜の人　純逸

佐保姫の気も俤や清はすみれかな　逸季

八重ひとへ今も九重菊の花　女 純夕

色もち花に識言かさき花の家　素立

さくらかれかくせてたくさんの月　純逸

松風の吹きされけり神無月　菊ブ 逸光

若竹と育てゝや露くらし　定居

舟路は秋と漕ゆく浅居哉　宮羽

餓ゑは收と打られちる哉　麹羊

兎うら哉硯戸下ておまくてかな　純近

一唱り夏ハ笑ふら杜き哉　君山

鵜の声は陰ふ雲や霜の麦　淡濱

三月二日青ふ子

初冬や佳扮てそうの雛賀　純近

渋帖く吟声も打ちにし嫦娥　文硯

鎮金ふハいつら見て衣る人　硯雨

呼声乃程を物あん蛙哉　純壺

見らしの藤笑ハや梅網代ち　純近

山桜もとおふも若し山院て　青淡

きめのまさんふまる人の深菊　逸賀

芝猿と猿ふハ打し抱すて尽　菱子

さかくれ蝶の居まる梅くれ　青岳

さく咲すゝやまえハうつくしき　許人

かさゝさの橋ハ安堵や毛ぬ鳥　純近

こゝろさハ兎ホ一夕妙ちるらん　純男

仮名ちの際まきふけれるかな　純員

名月や雲とぎつゝ錦留　近下

初折会霜ハ戸のさきお縁かな　純近

欲ふして螳の走りさき牡丹かな　近雅

小鼓の肘鹿のふりしてかさね　純素

うつらつ家の上より峰雀竜　近仲

大年の雲とはれ友髪丹かな　純近

人月の一寸きんや冬ま雨　近季

出立枕や新一つより月の数　故貞

髪きひく家人ハ石虹の月哉かな　近た

志る庵やまゐる菊き後帝　田樓

夕立や流飛たぐりとよ前乃色　純近

炭焼のんハ志ゐし雲の隣　水口 菊延

座頭にも拝ハれにけり梅の花　麦舎
似合ぬもし守にゆき紙子哉　里光
花さき顔を晴れてし紀哉　花守
ぬれてよる花ハ根よし傘　米雨
聟の人に見られて寒さ哉　紙流
雲の峰花見てゐる里さに　僧 楠光
曲水や紙を酒なかる人　紙言
初日数打て涼さきすみ哉　位立

咲とかも満る年ありかな哉　可興
十あ六生えふくや袖古ゑひ　紙迁
常の夜の名ふ二つ枝り哉　紙遊
葉隠てや見えし白雲の時鳥　琴月
菜畠の色と四月身松に　徳松
あり日雨降るも日し豆腐かな　扣似
鹿日ふハ母ふく鹿見て田植り哉　砥郎
此川の流と汲んかへる哉　房采

夜学の詩ひんでも芽帰るも　純道

行そよくかゆりの部屋　暇人

若竹の風に生きてやすらふ　逸十

その恩代をいさゝく田種に　祝阿

月しらに寒の穀も新粉に　宗郷

百合咲や五七も七郎も日傘　坐月

せつくこのまゝ男山や雲の峰　逸弓

豆中も淡くつくるや菜盆艸　純道

虫の音や旅宿ちるゝ草枕　買宿　純積

虫干もてき世につゝまして蝶子かな　竹尾

糸のりの松定めぬ月かな　二本松　純静

立波にかゝりとなりくる名月かな　吐綾

読れくるも掛合て水の秋　南ブ　純陽

分別りすとかゝめる梅の花　里東

松風と子の知るる子のりに　居邑

物けいば鬢吟に行し夜かな　淑九

此桜川行く先へ尋ねけり　上総　遊郎

花よりも見ぶハ菜のさかりかな　里撰

月の入る葉もなき屏風や二星　京　流芸

大雨にぬれて見ぶかり落ち葉　水巴

柳陰に古き都とこゝや小春庵　文尺

古ばせに羽ヒつるべも常なり　砧前

何も無き見世の冬枕　紀水

是隨く岩石古松文字ある所
紀遠近さんかゆり夜寒の一句をとゞめ
俳ニ儒家ならずして文をかくるを
古れさと見ゆに石刻録のくるがごと
ふ格の基ミもなし　雅り一行の石
唯しゝもれ流されていきれんや
岩代の碑下に筆を投

仙州十

宝暦三年酉仲秋　松葉軒壽梓

學園 大垣 第 6640 號 受入 36 3 14